

亜熱帯・温帯境界域としての島おこし課題
—与論における地域特性の再発見と地域振興—

長 嶋 俊 介

鹿児島大学多島圏研究センター

要 旨

与論の自律的發展を、内発性発揚・共治力形成・持続可能性展開・比較優位性の獲得から総括的に捉えた。与論の地域特性は、薩南諸島の中の最南端亜熱帯域であり、琉球文化圏にある。亜熱帯島嶼・亜温帯島嶼との比較島嶼学的考察で、地域戦略(観光・環境・文化振興)の基本構造を捉えた。「道の島々」復活は、那覇ルート・鹿児島ルート・奄美大島ルート集客ルートいずれにも有効な戦略である。環境・文化面でも、真亜熱帯への入り口地域性と、里海・里山復活、本物志向の見直しが求められる。与論では先導的情報革命が始まっており、共治活動は生活環境5領域を網羅しており、レベルは薩南島嶼の中でも高い。しかし、民主導性や、有償活動での体験学習・案内・福祉充実などに向けたNPOセクター形成が、課題である。与論ホスピタリティ向上には、生活環境5ウエア充足と、3ライフ領域の更なる質向上が戦略として重要で、それに向けたエンパワメントが、十分条件となる。

キーワード: 亜熱帯、島おこし、比較島嶼学、共治、地域固有文化

Toward Effective Governance and Regional Promotion
Peculiar to Yoron Island
—Re-recognition of Locality and Island Meritsas
Cultural Transmition Area from Subtropical to Subtemperate —

NAGASHIMA Shunsuke

Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University

Abstract

For self-directive development in Yoron Island, endogenous empowerment, co-governability,

sustainability and comparative advantages were considered. Locality and vernacular culture of Yoron is affected by subtropical climate; north from Okinawan Main-land and southern most in Amami Islands, and the part of Ryukyu Cultural Zone. The island promotion of culture, environment and tourism; through cross nissology between subtropical and subtemperate islands constitutes the basic structure of regional development strategy. The renaissance of the story of “Road of Islands” is the most effective and attractive strategy for passengers from Naha route, Kagoshima route or Amami Oshima route. A new challenge is facing the environment and culture. There is a need for the re-recognition of the entrance area to the southern central subtropical zone. Intrinsic goods and service development, and restoration of home beach and sea or home hill and forest, are required. The initiative development of high speed information network have been established in Yoron before other Satsnan small islands. The co-governance ability level is higher than any other Satsnan small island, and that is for every 5 human environmental ware (Human-ware, Spiritual-ware, Ecological-ware, Soft-ware and Hard-ware) . However initiatives by private sector is not well developed. There is no NPO sector that had been established yet; which is expected for an effective non-government role for tourist guide, study tour and welfare support for fair trade. The comprehensive empowerment toward 5 human environmental ware and the establishment of a higher quality of 3-dimension life(life course, living, vital life) are needed for a sufficient development of regional hospitality.

Keywords: Subtropical, Island Promotion, Cross Nissology, Co-governance, Vernacular Culture

はじめに

島おこし課題である自律的發展を考えると、その基本軸は、「内発性(endogenous)発揚」・「共治(co-governance)力形成」・「持続可能性(sustainability)展開」・「有利性(advantageous merit)の再発見」にある。その連動が中長期的視座での離島地域経営の展開そのものともなる。私的意思決定における自律 autonomy や自立、生活主体的共同 mutuality 力と共生 co-living 力形成は、地域精神においては外発性からの独立=「内発性」であり、地域経営においては住民主人公的展開=「共治」であり、地域未来世代に対しては「持続可能性」の責任の遂行が、同義的に対置される(注 1)。これに加えて、周辺地域の中で埋没しない工夫が、観光を基幹産業とする遠隔島嶼域では、決定的に重要となる。

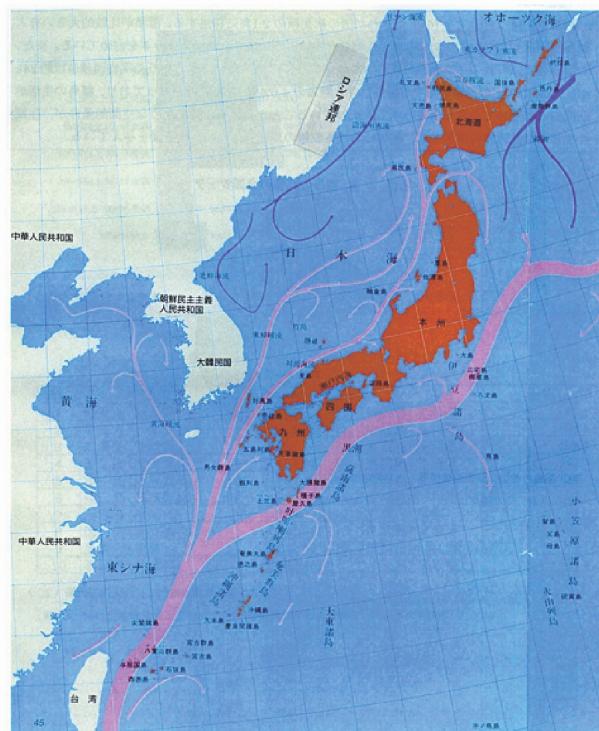
離島は隔絶性・環海性・狭小性に性格付けられた地域性を色濃く保持している。それが、交通交易経路・情報経路の基幹線から置き去りになるに連れて、経済的遅れや後進的生活・文化空間として、人口減少・経済衰退地域的な性格を帯びがちの空間として存在してきた。与論においても戦前期には集団での労働力移動が発生した。

その長期衰退傾向に、転機が訪れたのが、数次にわたる離島観光ブームであり、環境価値の見直しであり、スローライフ的生活空間としてのIターン志向であり、アイランドセラピーやタラソセラピーと呼ばれる癒やし憩い空間としての羨望性の高まりである。ここにたって与論個性の見直しと有利性メリット発揚の戦略が決定的に重要となる。その基本戦略と地域経営について考察する。

島嶼文化の見直し

薩南諸島は、奄美・琉球文化圏と接続し、「道の島々」として古来から、固有の文化推移域を形成してきた。常の離島以上に、特有の文化と、人情味有る暮らしぶりと、全領域網羅的かつオールラウンドな生活技術的ふれあいでの自然との共生に知恵を発揮している地域である。取り分け亜温帯域・黒潮文化圏(トカラ列島・三島諸島・屋久種子)と亜熱帯域・奄美文化圏(徳之島以北の奄美諸島)、さらには亜熱帯・琉球文化圏(沖永良部島・与論島)の生活文化は、温帯域島嶼域であるヤマト文化圏(薩摩文化圏)の島々とは、不連続的地域性を有している(図1、注2)。

図1 黒潮と亜熱帯・亜温帯島嶼域



(資料) 国土省離島振興課『日本の島—その自然と文化』平成2年4月 より作成

出所) 日本離島センター『離島の有する国土・環境保全等多面的機能に関する調査報告書』2001.3

亜熱帯性と島嶼気候資源

亜熱帯認識の表だった登場は、小笠原諸島の日本返還、それに続く沖縄返還以後である。「亜熱帯」は、本土復帰後の「言語現象」(注3)とされる。比較的新しいイメージである。沖縄では本土からのまなざしで、自己規定し、観光戦略の柱ともしてきた。この定義も、地理学的には、寒い冬を持たない熱帯と温帯の中間域で、緯度 25-30° (回帰線から 35-40° の間)、月平均気温 20°C以上が 4~11 ヶ月[ケツペン]、最寒月月平均 2~13°C[トロール:北半球]、暖地限界=最寒月月平均 18.3°C以下[ワイスマン]、寒地限界=月平均 9.5°C以上 8 ヶ月以上等と規定される。世界的に見ると、大部分の亜熱帯は砂漠=乾燥亜熱帯で、沖縄・奄美は、乾湿指数 10 以上の湿潤亜熱帯に属する(注3)。

では、南西諸島島嶼間の違いはどうか。表1のように、長期データで見ると、鹿児島との違いは歴然としている。また先島地区、沖縄本島周辺地区、与論・沖永良部地区、奄美本島周辺地区との間でも、確かに明確な違いがある。与論はといえば、北奄美地区より、まさに沖縄本島により近い温度域に存在している。この位置付けは重要である。

近年名瀬・徳之島が、陸上部実業団冬季トレーニング地として脚光を浴び始めているが、そこに目を付けて誘致に働きかけた海上レジャー・ホテル経営者などの先見性、行政側施設整備と共に、「与論・沖永良部では暑く(名瀬関係者)」「11月~3月冬気温は、合宿に最適、丁度良い季候・気温(徳之島・小出義雄)」が資源となっている。文化圏と共に、ツアー誘致資源面でも、徳之島・沖永良部間は、線引きされる。

沖縄本島との間はどうか。沖永良部方言の「二月一日寒さ(ニガチ・チーピサ)」「(身に堪えるほどの寒さが1日とはいえ月末にくる)」「二月風回り(ニガチ・カジモヤリ)」「(風向きが変わりやすい)」「北霧(ニシヂー)」「(中国本土からの黄砂:黄色の土煙)」「ふちよぶくり」(東風:白波が立ち漁が出来なくなり、島の東部が毎年悩まされる)(注4)は、最寒月二月特有の現象を示し、例外的亜熱帯性そのものである。真亜熱帯沖縄本島との違いとも見なされる。

ただし、取り分け冬季の与論と本土最南端鹿児島との温度差10度は、それ自体資源(避寒・観光・スポレク・療養・農水産業などの別展開可能性を生み出す)そのものである。

表1 南西諸島(琉球列島) 年平均気温

鹿児島	16.8°C	1913-1980年
名瀬	21.1°C	1897-1980年 1945年年欠
沖永良部	22.3°C	1970-1980年
与論	20.2-22.6°C	1970-1973年@21.6 *
那覇	22.4°C	1951-1980年
石垣市	23.2°C	(沖縄大百科事典)

* 与論町農村センター

亜熱帯の中の個性と競争・協働

亜熱帯島嶼域間で見ると論の「比較優位」戦略・「協働」戦略を考察してみる。

1 対沖縄本島・周辺離島(那覇経由戦略)

沖縄本島と、ヤマト(本土側)基幹都市との航空路・物流は、国家軸であり、頻度・経費・動員力は、まさに全国区である。この経路を活かすのが空路・海路を問わず動員力(特に空路)と経費面・時間面(特に海路)での与論の奄美他島嶼対比での有利性となる。

那覇の喧噪・混雑・都市振り↔落ち着き・静寂・のどかさ・海洋性等。マストゥリズム↔エコ・体験学習型・リピーターツーリズム。高級リゾート・高級店(食・買い物・土産物)↔特産・特注・手作り・長めの滞在受け入れ戦略。

沖縄本島周辺離島↔亜熱帯度がやや薄く・琉球文化圏では奄美文化混合型個性・ギリシャ村や百合が浜などの個性有る魅力

アイランドセラピー(沖縄本格タラソと異なる個性的タラソ開発)・人間味有る接し方[ホッカホッカ元気村・修学・有償体験メニュー・自遊空間]・本物志向[シャローン農園・民俗村・製塩サウナ・地元食材]などが基本戦略として考えられる。

2 対先島諸島(強力亜熱帯度・競争関係)

石垣・宮古は、やや高いが関空・羽田直行便の魅力度は大きい。強い集客力と別荘・Iターン・リゾート・イベント参加等の需要に強力な変化を生み出している。この魔力には、(同様直行便と人口規模引力がないので)与論は勝てない。ただし、先島周辺離島と与論とは同一条件で競合関係に立つ。西表島→亜熱帯自然魅力度、竹富島→至近距離・町並み・民俗・演出、波照間島→最南端魅力度、与那国島→最西端魅力度、その他離島の真亜熱帯珊瑚群等と対比しての魅力度をどれだけ打ち出せるかである。

それらほど熱くはない夏、強烈琉球文化とも違う親近感と個性(食文化も含む)、観光地としての洗練度・歴史、これらは、与論ならではのヤマト向けの比較個性である。

3 対奄美大島・周辺離島(大島経由戦略)

やや高いが関空・羽田と結ぶ直行便の魅力は大きい。奄美大島観光が全国区化し始めている。直行便のない与論は勝てないが、奄美大島空港経由の(那覇経由との比較)経費・便数次第では、奄美大島集客力活用戦略はありうる。

奄美・徳之島の適度の寒さがない⇒保養+α需要の開発、山がちの緑の濃さとの違い、ハブのいない魅力、沖永良部との連携・連続空間性戦略の見直し、強烈奄美(魅力)文化との違い、「道の島々」第2入り口・出口の演出([入り船・出船祈り]の文化復興)、奄美や鹿児島経由の旅客には、辺戸岬(聖徳太子や菩薩の寝姿にも見える)・伊是名伊平屋が身近に見える沖縄琉球一衣帯水空間性や、沖縄本土復帰前からの二七度線与論沖縄船中交流の歴史・イベントなどは、魅力度の高いロケーションメリットである。

4 対小笠原=洋島・亜熱帯魅力度

自然・文化・歴史の異質性は、競合関係にはならない。種の多様性、戦跡地、動物観察(鯨・

イルカ・大蝙蝠等)、植物観察(種の多様性・夜光茸類等)の真亜熱帯の魅力度は絶対的で、強いリピーター需要がある。有償ツアーも多様で人気度が高い。首都圏からは長時間遠隔地という共通性があるが、コスト面、純自然体験空間という面では、与論側不利である。

百合が浜などの里海魅力度の向上、相対的時間メリット(短期間でも、緊急変更にも対応可能)の見直し、異国情緒的遊空間の展開、暑すぎない亜熱帯での体験幅の有利性も資源となる。

5 対トカラ・三島=亜温帯孤立島嶼群

小島嶼性魅力・個性文化域魅力・温泉などの所在・低コスト性では、ライバル関係となる。しかし交通利便性・集客力では与論優位である。「道の島々」の北方、南方(琉球列島から言えば中央)交流での強調で、博物館・パンフ等で相互の大宣伝を展開することは新利益となる。

6 対温帯最南端との関係・比較

露地での園芸・観葉植物生産の八丈・種子島での生産は、温帯(ヤマト)市場へのエコ耐性を活用した成功例である。種子のジェット空港開設(2006年3月)、屋久の世界自然遺産(1993年12月)、本土と結ぶジェットフォイルでの短時間大量移動は、強力なライバル関係に立つ。

鹿児島からの空路でも時間・費用格差が大きい。しかし、鹿児島離島全域・一体イメージにリンクさせることは、次回需要に結びつく。温帯域との違和感のないイメージ事例として、ヤマトからのIターン成功者群の存在も大きい。亜熱帯からの温帯出荷も、沖永良部の100年百合物語以来の成功から学ぶべき物がある。与論に欠けていた取り組みとして、在来植生保存と景観形成は未来戦略に致命傷を与えかねない。

亜熱帯与論の文化・景観・自然・暮らし・街路の形成と復活、そして比較島嶼的魅力度の発揚を意識し始めることから、持続可能な与論島おこしが始動する。

与論島おこしとコガバナンス

公・共・民のバランスを与論の現況にみれば、公の1島1町選択による地盤低下覚悟・共の未形成・民の官誘導型活性定着化の段階にある。内発的共治力(endogenous governability)は形成途上期に入っているが、各種課題としてある環境・教育・防災・福祉・介護等々についての、それぞれの分野のリーダー形成や住民参加方式に工夫が見られる。まず官主導的色彩を残しつつも、民を主体とする、まちづくり委員会6分野を立ち上げた。この6分野は、生活・地域の総括的環境領域5領域を網羅し、かつ表2のように、その5分野に自ずから統合されていく。ただ民主導性は、ニュージーランド事例のように、市民防災に市役所の一室を使わせて、関係者の出入りはオープンで、マニュアル作成は彼らの共同努力でなされているような、(薩南諸島の中でもレベルが高いが)世界基準にはほど遠い。

共即ち NPO やボランティア組織、あるいは住民のネットワーク活動などについては、島外資源獲得と内外連携展開に、情報化推進は取り分け意義深い。与論方式の高速情報網形成による情報化が新しい波を、生み出しつつある。情報化は地理的条件デメリットを変える。

表2 与論まちづくり委員会6分野

①	IT推進グループ	soft-ware	e-Ok(マルケー)グループ
②	まちづくり塾自然環境学部	ecological-ware	
③	方言・文化伝承グループ	human-ware	
④	特産品開発グループ	hard-ware	
⑤	心の健康推進グループ	spiritual-ware	
⑥	環境保全・再生グループ	ecological-ware	(2と共同活動中)

2004年11月には元町立保育園跡地に、e-Ok事務所を開設し、情報教育拠点が形成された。また2004年にはメーリングリスト形成での、島内情報頻度が拡充し、島外各分野のサポーター(活発な支援・協働主体)との情報密度も向上した。その中核をになう「ゆんぬまちづくり塾」勉強会・講演会も活発化し、隔週単位で環境・保健等に関して実践的活動も始まっている。例えば、モクマオウ=大金久海岸風倒木対策での在来種育成・保全をめぐる共民活動等で、共治に関わる各種分野で、行政とは独自・独立の視座・役割を意識しての展開が増えつつある。

公・共・民の中でも、取り分け共領域、すなわち有償ボランティアや学習型ツーリズムをになう、また基幹産業補助・総合地域興しにも関わる、組織の未確立は、緊急を要する対応課題である。それは観光産業の転換、島内福祉体系の充実、島内生涯教育環境・文化復興、ワイズユース的自然環境再生の足がかりともなる組織と仕組みの問題である。

持続可能性・地域再生と島おこし(まとめに替えて)

持続可能性に関しては、南西諸島世界自然遺産登録に向けての展開の中で、真亜熱帯地域や東洋のガラパゴスとも称される奄美大島に置き去りになりかねない懸念があり、それへの対応が求められている。海浜林や自然林再生のコンセプトに、準亜熱帯原風景・全島公園化、とりわけ歴史有る多人数小島嶼である与論においては、人の関わった自然である里山里地海連動などの環境コガバナンス展開が必要とされている。観光長期下降傾向にたいしても、やはり準亜熱帯性の再考(過ごしやすい北亜熱帯、寒さ不足の脱温帯を商品化すること)が求められる。また、文化も言語も、珊瑚豊かな海も、真琉球そのものであるが、歴史的に形成されたヤマト・薩摩色との結合「琉球・薩摩混交文化」も、与論の利点・個性たりうる。那覇経由客向けにも、鹿児島・奄美大島経路客向けにも、極めて重要な配慮項目である。

与論方言復活、生活文化・生活技術掘り起こしは文化復興への兆しであるが、周辺域との比較や文化圏的研究の蓄積は、地元学的展開によりさらに幅が出来る。サザンクロスセンターや与論民俗村は内容的に推奨できるし、修学旅行生受け入れも成功事例といえるが、NPO 的組織での責任有る有償案内人や体験メニュー化(専門型・総合型・各種年齢集団対応)等として観光資源への活用も課題である。そのガイドライン作成と人材活用は、責任ある質の高い観光・交流島を生み出す。

健康・癒やし・長寿などの、プラスイメージと与論の地理条件を活かした工夫、長期滞在を呼び込む体制準備など、本物志向・体験メニュー開発・島個性の見直しの連動は、未来指向的新資源にもなる。引き継いできた、「パナ(花)ウル(珊瑚)共和国」、引き潮で姿を現す白砂の百合ヶ浜観光、海中公園、亜熱帯生活圏文化、時間制限が事実上無いヨロンマラソン、そして南欧・地中海的イメージ。「ほっかほっか元気村(老人客に長寿・人情・温暖を体験してもらうと共に、手紙の交流を続けたりした過去の展開)」。これらに有機園芸・食体験施設、タラソセラピー、思いがけない新名所としての製塩サウナなどの新機軸も加わりつつある。しかし、これらはホスピタリティの必要条件であるが、十分条件的には Human-ware (人情味有る接し方)、Spiritual-ware (地域文化的豊かさ)、Ecological-ware (自然環境の質)、Soft-ware (仕組み作り) と、Hard-ware (適正価格での Value for money) の充足にあわせて、3 Life (生命; 生理的・生殖的存在条件、生涯 文化的精神的 存在条件、暮らし; 社会経済的存在条件) の質確保・向上(注 5)が無ければならない。それらに向けた人的資源開発・主体形成、即ちエンパワメントを通じた、地域興しそのものの質が、問われることになる。通常、羅列的になる行政側作成の環境施策も(注 6)、その生活環境の総合性に裏打ちされた、質向上・持続可能発展的とする上でも、住民関与力の育成・島全体の環境総体への研究力の形成(注 7)・島外専門家サポーターの寄与システム充実・責任的 NPO と民間コーディネーター形成に向けた、エンパワメントが最重要課題となる。

注

- 1) 詳しくは長嶋俊介・田村久美「生活福祉の社会化と新家政知の展開」日本家政学会 Vol.22-5, pp.363-373, 2004.5, Misa MORITA and Shunsuke NAGASHIMA, "Livelihood Management by Using Three-life Five-ware Five-hierarchy Model for Partnership, Stewardship, and Citizenship in Home Economics", IFHE The 20th World Congress in Kyoto 2004.8
- 2) Shunsuke NAGASHIMA, "The Culture of Japan's Outer Island ", 1st International Conference of the Small Island Cultures in Kagoshima University, 2005.2
- 3) 『沖縄大百科事典』, 沖縄タイムス社 1983. 5
- 4) 橋口満、「にがちーかごしま言葉の泉」南日本新聞 2005. 2
- 5) Shunsuke NAGASHIMA, "Governance of, by and for the Islander toward Lifonomic Civilization-----Comprehensive Model for Island Sustainability and Development under the

Trend of Globalization" Islands of the World VIII, Changing Islands-Changing Worlds, ISISA
(International Small Islands Studies Association) in Kinmen Is., Taiwan, 2004.11

- 6) 与論町『パナウル王国の環境憲法～与論町環境総合計画～』2002年
- 7) 長嶋俊介「離島地域における「学外活動の地域活性化への貢献」及び「アイランドキャンパス」構築の方法, 方策について」鹿児島県離島振興協議会・鹿児島アイランドキャンパス推進シンポジウム(種子島・鹿児島大学多島圏研究センター)2005.1